

大和文華館は今秋、開館10周年を迎えました。それを記念して、この「美のたより（15号）」を「特集／70年代の大和文華館」としました。これは美術館としての大和文華館の未来をひらき、「明日のための、あなたの美術館」をつくるための一試案です。

1. 美術品の鑑賞と知識

昨年の3月7日付京都新聞夕刊の「わたしの週末」欄に、京都市にお住まいの若い女性が「工芸品鑑賞」という一文を寄せておられました。この方はお嫁入り前の家事見習いに忙しい毎日ですが、工芸品がお好きで、ちょっと市場に買物に行かれる時でも、古美術商のショーウィンドウをのぞき込んでみられるそうです。そして、『総合資料館、博物館などでは、土曜日の午後、列品講座をはじめ、いろいろな講演会が行なわれ、それに出かけるのが楽しみである。とくに興味のある「やきもの」、「茶碗」といったテーマの時は、時間の許す限り、芦屋の滴翠美術館、池田の逸翁美術館、奈良の大和文華館、大阪の藤田美術館などへも出かけることがある。基礎知識のない私は、講演を聞いてもどれだけ理解できるかどうか疑問だし、みても、ただながめているだけで、作品のよしあしもわからないけれど、たまたま、今までに見たり、聞いたりしたことのある作者や作品に出あうと、なつかしい友だちにでも会ったように引きつけられ、いつまでも足をとめさせられるのである』と書いておられます。

古美術品というと、何か現代生活からかけ離れたもの、一部の趣味人のためのものと考えられがちですが、決してそうではありません。すぐれた芸術品は万人の鑑賞のためにあるべきものです。また長い間人びとに愛され、古い昔から大事に伝えられてきた美術工芸品には、それを作った人やいつくしんできた人たちの人間性がこめられています。私たちが美術品を鑑賞して、その美しさに感動する時、ただ一つの物質をみつめているのではなく、そのものとの間の人間的交流を楽しんでいるのだといえましょう。

現代は情報化の時代ですが、反面人間的な対話が不足していると言われています。こまかい社会機構のわくに組みこまれ、忙しい毎日を送っている私たち現代人は、ゆたかな人間的な感情を忘れ、自分自身をさえ見失いがちになります。そのようなとき、静かな美術館で優れた美術品と声なき対話のひとときを持つことは、私たちの人間性の回復にきつと役立つことでしょう。先ほどの若い女性が、忙しい時間をさいて週末に美術館を訪れられることにも、そのような意味があるのでしょうか。

美術鑑賞は見ることにはじまり、見ることに終ると言われています。そこで美術館の本務は何よりも、よい美術品を蒐集し、それをよい環境と行届いた展示によって、なるべく沢山の方に見ていただくことにあります。

当館は美術品のもつ美しさが皆様方にもっとよく伝わるように、美術品の蒐集においても、展示においても、あるいは展覧会の企画においても一層努力を続けてゆくつもりです。

しかし、美術鑑賞はただ見ることで終わるではありません。すぐれた美術工芸品に接したとき、誰しも「このような美しいものを誰が作ったのだろうか」、「誰のため、何のために作ったのだろうか」、「どのようにして作ったのだろうか」、「作者はどのような時代に生きたのだろうか」、あるいは「このような美の伝統は後世にどのように伝わったのだろうか」などという疑問をいだきます。このような疑問をいだき、それを少しずつ解決してゆくことが、美術品との人間的な交流をさらに深くこまやかにしてゆくと言えます。美術鑑賞はこのように人間の知識欲をたかめます。先ほどの若い女性が、美術館で開かれる講演会や、列品講座に出かけられるのも、ただ見ることに満足できないからでしょう。

当館では、このような希望に出来るだけこたえるため、わかりやすい解説札を添付し、定期的な列品解説をおこない、随時講演会をひらくなど、皆様方の鑑賞や勉強のお手伝いをする仕事を今後も続け、発展させてゆきたいと考えております。

先ほども申しましたように、美術品は万人のためにあるもので、決して一部の専門家や愛好家のためにあるものではありません。しかし、美術品についての知識を一般の方がたにわかりやすく伝えるためには、そのような知識の基礎となる専門的な研究がどうしても必要となります。美術館における研究活動はこの目的のために行われます。また、学問の進歩に貢献することは、美術館のつとめのひとつですから、美術館は一般大衆のためにあるとともに、また専門家のためにあるとも言えましょう。

当館は昭和26年以来、美術研究雑誌「大和文華」を刊行し、美術史上のいろいろの分野の研究を発表してきました。このように、専門家を対象とする研究や情報伝達の活動には今後も力をいれ、それによって集積された知識を一般のかたがたに還元するようにしていきたいと考えております。



季刊 美のたより No.15

昭和45年11月1日

発行 大和文華館